第2章　鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

1　鎌倉市における歴史的風致の構造

鎌倉においては、武家政権の発祥に起因する都市形成の歴史の中で、社寺や近代に建てられた和風や洋風の建築物など、様々な歴史的遺産が生まれた。その多くは幕府が置かれた鎌倉地域に点在し、層を成して重なり合う複数の歴史的風致の核となっている。

特に、鎌倉幕府の成立以降、各時代の為政者（いせいしゃ）などによって盛んに建立された社寺は、現在に至るまでの時の流れとともに、「生きている歴史的遺産」として現在も宗教活動を続けており、鎌倉を代表する歴史的風致を形成している。

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉の歴史を辿ってみると、康正元年（1455 年）以降、鎌倉公方の足利氏が鎌倉支配を放棄したことなどによってまちは衰退し、かつての中世都市の活気は失われ、静かな農漁村へと変わっていった。今日行われている沿岸漁業は、この頃より続く生業（なりわい）の一つであり、大漁や海の安全を願う伝統行事には、社寺の存在が欠かせない。

江戸時代に入り、泰平の世が続くようになると、それまで信仰の対象であった鎌倉の社寺は、参詣を兼ねた遊山の対象としても認知されるようになる。鶴岡八幡宮参道の若宮大路は遊山客で大いに賑わいを見せるようになり、明治時代に入ると、観光周遊に関わる鉄道として江ノ電が開通する。

また、明治時代から大正時代にかけ、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた貴顕紳士の中で生まれた価値観が知識、道徳、習慣、作法、生業、芸術といった人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになり、まちの発展に寄与することとなる。

戦後、都心近郊のベッドタウンとしての需要が高まると、鎌倉の象徴ともいえる鶴岡八幡宮の裏山で宅地造成の計画が持ち上がり、古都の景観を守るために立ち上がった住民等によって、後に「御谷騒動」と呼ばれる日本初のナショナルトラスト運動が展開された。古都保存法が制定されるきっかけとなったこの市民運動の精神は、現在も市民を中心とした人々の間で引き継がれており、山稜部の緑を保全する活動などが市内各所で展開されている。

このように、鎌倉の歴史的風致を構造的に整理すると、社寺の存在が鎌倉の歴史・文化の源泉として位置付けられ、全ての歴史的風致の形成に深く関わる基盤的な役割を担っているものといえる。

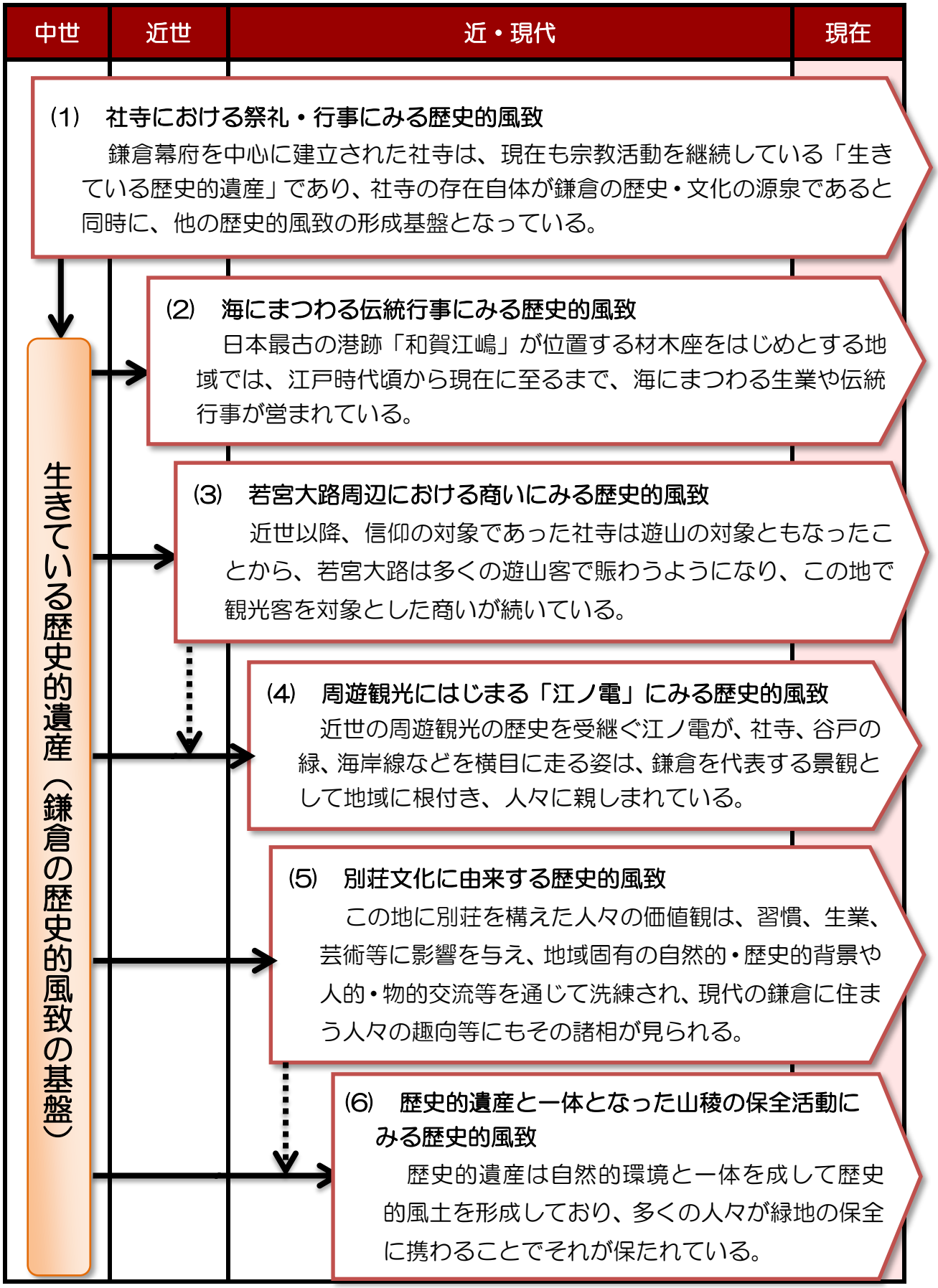

図2-1　歴史的風致の構成

社寺における祭礼・行事にみる歴史的風致

写真2-1　鶴岡八幡宮

海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致

写真2-2　潮神楽

若宮大路周辺における商いにみる
歴史的風致

写真2-3　若宮大路

周遊観光にはじまる「江ノ電」にみる
歴史的風致

写真2-4　江ノ電

別荘文化に由来する歴史的風致

写真2-5　鎌倉文学館（旧前田家別邸）

歴史的遺産と一体となった山稜の
保全活動にみる歴史的風致

写真2-6　鎌倉風致保存会の活動